産経新聞　朝刊　和歌山版　2023年4月2日

くじら日記

太地町立博物館から

鯨類の輸送

かたときも離れない飼育員

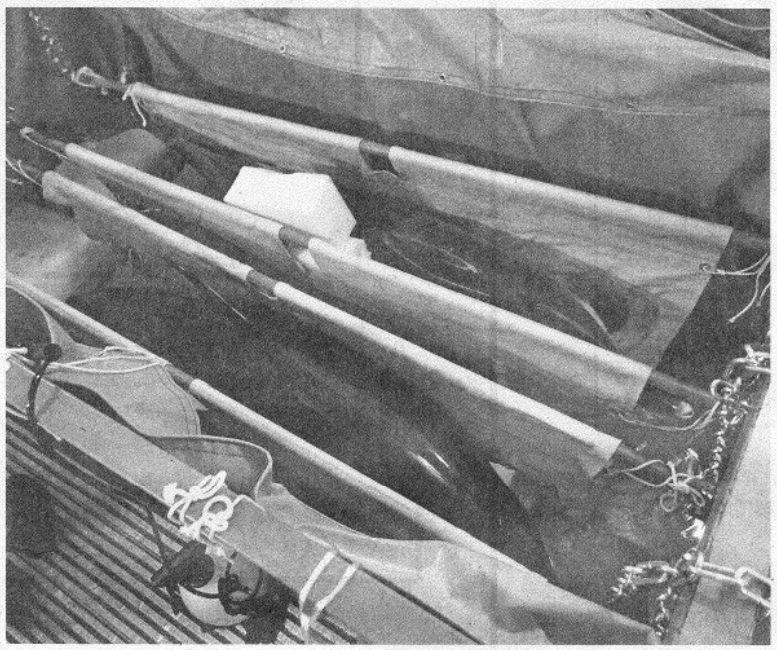
今年2月、白浜町の「アドベンチャーワールド」の人気動物だったジャイアントパンダ3頭が中国に送られました。パンダはケージに収容され、トラックに乗って旅立ちました。

一方、太地町では、生きたままイルカを捕獲するイルカ追い込み漁が行われていることもあり、学術交流している国外の水族館に鯨類を送り出すことがあります。この場合、くじらの博物館は、鯨類の収集、飼育管理、輸送で協力しています。

さて、陸生哺乳類であるパンダと生活環境が大きく異なる鯨類は、どのようにして輸送されるのでしょうか。

鯨類は一生を水中で暮らす海生哺乳類です。水中では空気中の20倍以上の熱が奪われますが、その中でも体温を一定に保てるよう生理的に適応しています。また、水中では浮力があり、自らの重さである「自重」を感じることはほとんどありません。

そうした鯨類を、輸送のために長時間、水中から離れた環境に置けばどうなるのでしょうか。放熱がうまくできずに体温が上昇。皮膚は乾燥してやけどしてしまいます。また自重によって、肉体的にも精神的にも大きなストレスを受けるでしょう。



水を張った水槽で運ばれるイルカ。担架の間からイルカの黒い背中が見える

つまり、鯨類の輸送は「体温上昇」と「乾燥」の防止、「自重」によるストレス緩和を考慮する必要があるのです。さらに、1分間に2回程度、頭頂部にある鼻孔を使って肺呼吸することも忘れてはいけません。

鯨類の生態に適した輸送手段の一つに、「コンテナ方式ウェット、スリング」と呼ばれる方法があります。比較的小さい水槽の中に、専用担架に乗せた鯨類の身体を、おなかのほうを下にした姿勢でつるします。鼻孔が水に浸されないよう身体の3分の2程度の高さに水を張ります。水面から出ている背中は、飼育員がスプレーなどで湿らして乾燥を防ぎます。この水槽を輸送車両や航空機、あるいは船舶に積み込んで運ぶのです。

過去の輸送では、移動中にイルカがちょっとした物音でビクッと反応することがありました。熟睡していたところを起こしてしまったようです。様子を見ていると、また眠りました。呼吸は深くゆっくりしており、身体は火照りがなく、心拍は落ち着いています。リラックスできているようでした。

飼育員はイルカからかたときも離れず、観察を続け、水をかけてやり、快適に過ごせるよう世話します。

日をまたぐこともある輸送は、緊張と疲労が伴います。しかし、どこに行くかも、いつ着くのかもわからないイルカにとって、飼育員は唯一の頼りです。一時たりとも気が抜けません。

（太地町立くじらの博物館館長　稲森大樹）

◇

原則、第1日曜日に掲載します。